



金沢大学大学院
社会環境科学研究科
客員研究員

菊 本 舞

理論と現実のあいだ

生協で2年弱働いてから大学に戻り数年を大学院で過ごした。大学院に入ったのは現実の場面でなかなか変えられないことを変える術を学びたかったし身につけたかったからだ。しかしその術は未だに身につけられそうにない。

この数年はフィールドで年配の方に地域の過去から現在の事柄について話を伺う機会が多かった。地域社会のあり方の変容と、変容の一方で変わらずにあるものの両方を探る。変容するものはなぜ変容し、変わらずにあるものはなぜ変わらずにあるのか。そして変わらずにあるように見えるそのモノは本当に変わっていないのか、あるいは変容したように見えるそのモノは見かけどおりに変質したのか。地域ごとにそれらの内容は異なる。具体的な細かなことの積み重ねで地域の姿が見えてくる。それぞれの地域が個性的で自律的な地域づくりをめざそうとするとき、過去の歴史をひも解かずして地域社会の今後の未来を描くことはできない。

年配の方に話を伺うとき、彼らは必ずといっていいほど、彼らの子や孫と同世代の私に向かって、「何の役に立つか」と問いかけた。

失われた10年と言われた1990年代はとうに過ぎ去り21世紀を迎えてはや5年。しかし地域経済が活気を取り戻したとはいえない。そればかりか勝ち組と負け組に二分されて、負け組は今後もますますひどくなるという予測もある。そういう時代に生きながら、若者が何をやっているのか。今日、明日、生きていくための術を考えずに何をやっているのか。何をのうのうと地域の過去の歴史にさかのぼっているのか。今日儲け生活する術を考え

実践しろ。

同世代の目はもっと辛辣だ。サービス残業を当たり前にこなし仕事で午前様になってしまう毎日に疲れている人々が「何やってるの?」と私に問う。「みんなが楽しく暮らせる方法はないかなって考えている」と答えたら、「じゃあ、明日パチンコで勝つ方法を教えて」と云われたこともある。

何度も何度も問いかけられるうちに、大学院に入った頃の強い思いはくじけそうになる。問いかけの言葉に自信を持って答えることができなくなる。現実を少しでも変える術を知りたくて身につけたくて大学院に入ったのに、現実からどんどん遠ざかっていくジレンマに陥ってゆく。

このジレンマは私ひとりのものではないと思う。私ほど常にはでなくとも、おそらく研究に関わる多くの人がぶつかる壁のひとつなのではないだろうか。そしてそれを敢えて書いてみたのは、私に問いかけられた言葉は多くの人がぶつかる壁であると同時に、個人に対する問いかけの言葉にとどまることなく、そのまま今の大学やあるいは本誌の発行元である地域経済情報センター（以下、センター）に対する問いかけでもあると思うからだ。

大学が、社会に対して、地域に対して、何ができるのか切実に問われている。現実を変えられない理論は意味がない。確かにそう思う。しかしただ現実を与件として受け取ることも意味がない。

このことは同時に、現在のところ学究の世界にとどまる理論の存在意義を認めないということを決して意味しない。今この瞬間に社会の側から要請されない理論だとしても、それがいつどのような形でとつぜん要請されるかわからない。また今すぐに役立つ理論が日々の糧を得るのに有用だとしても、同時にそれだけが人の生きる道を支えているのではないことを、おそらく誰もが知っている。重要なことは理論の中に没頭しているときでも、常に現実を意識しているかどうかなのだろう。

大学の外に目を向けてみれば、理論と現実の両方に軸足をきちんと置いて実践している人たちが

いる。それが本号で執筆された諸氏であるのだろう。彼らの実践には今後の大学やセンターのあり方にとってのヒントが散りばめられている。

*美味しいし健康。だから農薬を使わないでつくられたものを食べる。(葛葉氏)

*公私が分裂した生き方は疲れる。だから農的暮らしを実践してみる。(西田氏)

*自分が戦争に行くのはイヤだ、加害者にも被害者にもなるのはイヤだ、だから戦争には反対だ。(ほしの氏)

彼らの言葉は、好きか嫌いか、気持ちがいいか悪いか、毎日の生活の実感が込められて紡がれている。だからこそ彼らの言葉は実感を持った言葉として大勢の人のもとに届き、そして心に受け止められ、フェアトレードや平和活動や食を中心とする実践へと広がっているのだと思う。

しかし同時にまた、多くの人が自分の気持ちに正直に生きることが限定される世の中でもある。西田氏が書いておられるように「パートタイムナチュラリスト」はその典型であろう。気持ちよくはないけれど「仕方がない」と諦めてしまう人も多い。

「仕方がない」と諦めてしまわないために何ができるか。大学やセンターに求められているのはこうした生活の実感に基づいた「諦めないための何か」や「諦めないための方法」を提示することなのではないか。社会に対してしかり、学内の学生に対してもしかり。

無気力に諦めてしまわない実践を続けていらっしゃるおひとりが水野氏だ。学生たちには自分たちの専門性を生かしながらまちづくりに関わることで地域社会に目を向けさせる。しかもそれらは「楽しさ」や「充実感」を伴う方法で、一過性のものでなく継続できるだけのインセンティブを持っている。

また大人たちによる実践をサポートするのが石川氏のとりあげられたものづくりに関わる学校や起業支援である。さらに葛葉氏がとりくむフェア

トレードの実践である。「諦めない何か」を実践するということは、「生活する」ということを再定義・再構築しながら、自らの手でどれだけ作り出していけるかどうかなのだと思う。それは西田氏の「農的な暮らし」の実践とつながっている。

こうしたオルタナティブなあり方は既にさまざまな場所に転がっていて実践されてもいる。大学あるいはセンターに求められているのは、生活の実感をよりどころとするような現実のさまざまな問題と、長年にわたって大学や学界の中に蓄積されているはずの理論とのあいだをつなぐものなのだろう。このことはもちろんこれまでも既に何度もさまざまな場所で議論され要請されてきたことである。地域におけるさまざまなオルタナティブな実践が、単に好き嫌いや気持ち良い悪いといった感情のみによって動いているように見えるときでも、それは必ず何らかの理論に裏打ちされている。このことを明らかにしていくことは、オルタナティブな実践にとっても大学のあり方にとっても重要である。理論と現実とのあいだを行き来するものは最終的には実践でしかありえず、また継続的で指向性のある実践の裏づけに理論は不可欠なのだから。だからこそ大学やセンターが実践を支えることが、冒頭で述べた私に対する多くの人々の問いかけの背景にある要請なのだと思うのだ。

